



ポポフ

No. **24**

2017年7月号

ニュース

ポポフ (POPOF) はポレポレ基金 (Pole Pole Foundation) の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立された NGO (非政府・非営利団体) です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがき、カレンダー、エコバッグを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で保護・教育活動や必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと思います。



カフジ・ビエガ国立公園の低地部 Itebero でポポフに加わり

張り切る新メンバー

ポポフが Tusk Conservation Award を受賞

ポポフの代表者ジョン・カヘークワが、この度 Tusk Conservation Award を受賞しました。(http://tuskawards.com/)

この賞は 2013 年に創立され、アフリカで卓越した自然保護の業績をあげた個人に授与されるもので、とくに実践的なフィールドワークと環境教育の成果が対象となります。1990 年代からアフリカの自然保護を目的に活動が続けていた Tusk Project が、2003 年に NPO としてニューヨークに本部を置くようになり、2005 年にはイギリスのケンブリッジ公ウィリアム王子がパトロンとなりました。以来、Tusk は Pan African Conservation Education (PACE) と呼ばれる環境教育や自然保護に関する持続的な政策に資する教材や映像を提供してきました。今までに、アフリカで 15 万人以上の子どもたちがこのプログラムを受けています。

授賞式は、昨年 11 月 30 日にロンドンのヴィクトリア & アルバート博物館で催されました。ジョンは授賞式に出席するために 1 ヶ月前からヴィザ取得などの準備をして、かろうじて受賞前日にロンドンに到着しました。授賞式では、ウィリアム王子が William Award をジョンへ授与し、デヴィッド・アッテンボロー氏が南アフリカとアンゴラの自然保護官にそれぞれ Tusk Conservation Award と Wildlife Ranger Award を授与しました。

ジョンの受賞理由は、25 年にわたってボレボレ基金の代表者としてゴリラを初めとする野生動物の保護に尽力し、相次ぐ内戦にもかかわらず住民たちの環境教育に貢献した功績が認められたということです。とくに、子どもたちに対する環境教育は大きな貢献として評価されたと聞きました。

授賞式でジョンは、カフジのゴリラにとって致命的な時期にこの賞が贈られたことに感謝の意を述べました。昨年、カフジ一帯に生息するヒガシローランドゴリラは、マウンテンゴリラと同じ「高い絶滅の危機に瀕する」(Critically Endangered)種として IUCN の Red List に登録されたからです。また、コンゴ民主共和国では内戦を恐れて観光客の足が途絶え、ゴリラを保護するための基金が得られない状況であることも訴えました。しかし、ジョンは希望を失っていないこと、ゴリラといっしょに過ごす魔法のような時間を子どもたちの世代が、そしてウィリアム王子の子どもたちが味わ

える日がきっと来ると述べました。また、この賞はカフジ・ビエガ国立公園で働くすべての人々、ボレボレ基金の仲間、妻のオデットや子どもたちと分かち合いたいと感謝の言葉で締めくくりました。とても感動的なスピーチだったそうです。

振り返ってみれば、長い道のりでした。1992 年に、カフジ・ビエガ国立公園のガイドだったジョンが、それまで貯めたガイドの手数料を元手に立ち上げたのがボレボレ基金です。野生動物の保護をめぐる公園側と地元住民の対立が深まるのを何とか和らげようとしたのです。観光客の関心を村へ向けて外貨を落とし、ゴリラの保護へ村人たちの参加を呼びかけ、自立的な保全活動を展開してきました。その間、隣国ルワンダからの内戦にともなう大量の避難民の流入、地元の内戦勃発、引き続く密猟や地下資源の密掘の急増で、ゴリラやゾウを初めとする多くの野生動物が犠牲になりました。ポポフは何度も活動方針を変えることを余儀なくされ、観光客の誘致やゴリラグッズの制作から、難民の援助や密猟の調査などに切り替えて活動を続けてきました。しかし、当初から変わらず力を注いできたのは、苗木センターと環境教育学級の経営です。多くの子どもたちがこの学級で地元の自然とゴリラを守る大切さを学び、苗木の育成とその植樹に取り組んできました。苗木はすくすくと育って村の周りに茂り、村人たちがたきぎや建材に用いるため、保護区の本がむやみに切られることは無くなりました。養魚池も完備し、環境教育学級の子どもたちによって管理されています。図書館もできて、子どもたちの勉学意欲も高まっています。



受賞記念品を持つジョン・カヘークワの一家

Tusk Conservation Award の受賞を通じて、これらのポポフの活動が世界に知られ始めたのはとても嬉しいことです。1993 年の設立以来、ポポフの活動を支えてきたポポフ・ジャパンとしても、長年の苦勞が報われたという気持ちでいっぱいです。幸いなことに、最近では地元でもゴリラの人气が急上昇し、ゴリラが密猟によって命を落とすこと



ママたち、子どもたちの現地研修

ジョン・カヘークワ

6 月は日本では雨季ですが、カフジでは乾季のはじまりです。そして、学校が休みになり、海外からゴリラを見にたくさんの観光客がやってくる季節でもあります。残念ながら、長く続いた内戦と今なお不安定な政治情勢によって、観光客の足はカフジから遠のいていますが、それでもこの季節に観光客の姿が増えることに変わりはありません。その際に、カフジのゴリラがどういう歴史をたどってきたのかを地元住民が知っていることはとても重要です。観光客から問われたときに、ゴリラと地元の人間とのつながりについて適切に答えることができるからです。

今からちょうど 20 年前の 1996 年に、カフジがあるキブ州で内乱が勃発しました。これは、1994 年の隣国ルワンダでの民族紛争と大規模な難民の発生に端を発したものです。カフジ・ビエガ国立公園のすぐそばに、40 万人規模と 5 万人規模の難民キャンプができ、フツ系の民族が収容されました。ルワンダでは戦いに勝利したツチ系の民族が政権を掌握しました。ところが、カフジの北と南にはツチ系のバニャムレンゲと呼ばれる人々が昔ルワンダの内

はなくなりました。まだ観光客はもどってきていませんが、時々訪れる人々によってカフジのゴリラの魅力は確実に世界に伝わっていると感じています。ポポフの活動がより一層、地元や世界の人々の協力を得て発展することを心から願っています。

紛を逃れて移り住んでおり、フツ系の人々と対立していました。つまり、難民キャンプのフツ系の人々はカフジで再び、ツチ系の人々に挟まれることになったのです。昔からコンゴ政府は難民のツチ系の人々に選挙権を与えず、政治への参加を認めなかったため、フツ系の人々への支援はツチ系の人々への更なる迫害につながると受け取られたのです。これらのバニャムレンゲたちが放棄し、反政府勢力と連合して 1996 年の内乱は起きました。

難民キャンプからは数 10 万人の難民たち、それに加えて地元の人々も一斉にカフジの森へ逃げ込み、反乱軍から逃れようとしていました。短くても数週間、長ければ数ヶ月の間、人々は森の中で飢えを凌がなければならませんでした。多くの野生動物が食料として狩りたてられ、食べられる植物は根絶やしにされました。キブを制圧した反乱軍は西方 2000 キロに位置する首都のキンシャサへ向かって進撃を続け、翌年政権を奪取して、国名はザイルからコンゴ民主共和国へと改名されたのです。

この 1 年間で、ゾウの数は 450 頭から 5 頭にまで減り、260 頭いたゴリラも半減しました。しかも、内戦が終わっても野生動物たちの悲劇は繰り返されました。内戦でずた



ヒトリオスのムガルカを観察するトゥワ人の女性たち

ずたになった交通網によって物資や食料が不足し、内戦中に家畜や畑も失って、人々は当座の食料や燃料を森に求めたのです。密猟は絶えず、たきぎや建材、そして薬草を採集しに保護区に不法侵入する人々の数は激増しました。公園のパトロール機能もどった今でも、これらの不法活動は後を絶ちません。それは地元の人々が電気もない生活を強いられており、自然の資源に大きく頼らざるを得ないからです。

ポレポレ基金では、まず外国からやってきた観光客にこうした歴史を解説し、虐殺にあったゾウやゴリラの骨を手にとって見せ、当時の状況を再現して見せます。そして、村人たちが日々の暮らしに必要な燃料をどんなに苦労して集め、運んでいるかを体験してもらうことにしています。その上で、村を紹介し、畑で取れた作物を使って伝統的な料理を味わってもらいます。その行程に地元の子どもたちを参加させることで、子どもたちにもゴリラをはじめとする土地固有の動物たちに何が起こったのか、それを守るために何が必要かということを学んでもらおうと考えています。

観光客が訪れるチマヌーカ集団では最近1頭の赤ちゃんが生まれました。20歳以下のゴリラの子どもたちは内戦下のゴリラの虐殺事件を知りません、その後、前と同じように観光客が訪れるようになってからは、人間が彼らを襲うことはなかったはずですから、人間を友達と思っているはずです。ゴリラの子どもたちが楽しそうにじゃれあい、ときには人間に興味を示してそうっと近づいてくる姿を観察するのは、とても楽しい体験です。でも、シルバーバックのチマヌーカをはじめ、多くの年配のメスたちはあの苦難の時代を知っているはずです。群れが襲われてリーダーが殺され、散り散りになってチマヌーカのもとへやってきたメスもいるからです。彼らは人間をどう思っているのでしょうか。

同じように、アンガ小学校や中学校に通う地元の

子どもたちも、あの虐殺の時代を知りません。地元でも数10万人の人々が内戦の犠牲になりました。ただ、ゴリラと違って人間はその悲劇を教訓として語り継ぐことができます。再び同じような悲劇が起こらないために、ゴリラたちの人間に対する信頼を崩さないために、この歴史と事実をしっかりと伝えていかねばなりません。ポポフでは定期的に子どもたちを公園に招待し、ゴリラたちの歴史と内戦の時代にどんなことが起こったかを詳しく解説しています。

地元の子どもたちは驚くほどゴリラを知りません。先日、アンガ小学校で一人の少女がとても上手にゴリラの絵を描きました。ところが、そのゴリラには長い尻尾がついていたのです。先生が聞くと、少女は「ごめんなさい。私は野生のゴリラを見たことがないんです」と答えたのです。地元の子どもたちも観光客も15歳にならないとゴリラを見に行くことは許可されません。公園に務めていてゴリラをよく知っているガイドやレンジャーの子どもたちですら、ゴリラを見たことがないのです。

さらに、ガイドやレンジャーの妻たちもゴリラを見たことがありません。それはゴリラの観察料が高いからです。外国人の観光客が払う500ドルに比べ、現地の人は20ドルと割安ですが、150～300ドルの月収のなかではとても払える額ではありません。そこで、ポポフの女性会長オデット・カヘークワが、公園でガイドやレンジャーの案内人として活躍している元狩猟採集民のトゥワ人の妻たちを誘い、ゴリラの観察ツアーを試みました。参加したのは9人で、ガイドの案内で森を歩き、単独で暮らしているヒトリオスのムガルカに会いました。彼女たちは、1970年にここが国立公園になり、移住させられてから正式に森を歩くのは初めてです。ゴリラに始めて面会した彼女たちはとても感慨深げでした。その後、みんなで公園の歴史を語り合い、ゴリラと共存していく未来を共有することを誓いました。この試みはこれからも続けていきます。

オデッタ・カヘークワとプラカードを持つトゥワ人の女性チーム



阿部知暁 画

ゴリラの行動文化

山極寿一

このたび、野生のゴリラの研究者たちが連携して、ゴリラの行動の地域による違いを調べ、そのなかから文化につながるような行動を抜き出す共同研究の結果を発表しました。言葉を持たない動物の社会における文化的行動とは、遺伝によらず、他の個体の行動を学習することによって広がったと判断できるものです。そのため、必ず地域による差があり、それは地理的な距離に必ずしも対応しないと予想されます。チンパンジーやオランウータンには、道具使用などの行動文化があることが知られていますが、これまでゴリラについてはほとんど報告されていませんでした。

対象となった地域は5ヶ所です。残念ながらポポフの活動するカフジは今回含めることができませんでした。内戦の影響で詳しい行動観察が途絶えてしまっているからです。一頭一頭のゴリラに名前をつけて、毎日4時間以上の行動観察を10年以上続けている場所で、ヒガシゴリラではルワンダ共和国の火山国立公園とウガンダ共和国のブウィンディ国立公園、ニシゴリラでは中央アフリカ共和国

のザンガ・ドキ国立公園とザンガ・サンガ国立公園、それに私たち京都大学のチームが調査しているガボン共和国のムカラバ・ドウドウ国立公園が選ばれました。ゴリラはニシゴリラとヒガシゴリラの2種に分けられ、それぞれマウンテンゴリラとヒガシローランドゴリラ、ニシローランドゴリラとクロスリバーゴリラの4亜種に分類されています。今回は、マウンテンゴリラ2地域、ニシローランドゴリラ3地域ということになります。

41の行動が挙げられ、そのうち23の行動が文化的な特徴を持っていると判断されました。採食行動が1つ、環境探索行動が9つ、社会交渉が7つ、身振りやしぐさが5つ、コミュニケーションが1つです。いくつか興味を引く行動をあげて見ましょう。

まず、マウンテンゴリラとニシローランドゴリラの種間で大きな違いが見られたのは、水に関する行動です。水面に映った自分の顔をじっと見つめる行動はマウンテンゴリラにしか見られません。逆に、手をコップ代わりにして水を飲むのはニシローランドゴリラだけです。川を二足で立って渡るのも、水を跳ね飛ばしてディスプレイするのも

ニシローランドゴリラにしか見られません。これは、マウンテンゴリラが暮らす高地には水を湛えた大きな川がなく、水に触れるのをむしろ避ける傾向があるからでしょう。だからこそ、水面を注意深く見つめる行動が発達したのかもしれませんが。また、面白いことに浅い小川に入ってお尻を水につけて座するという行動は、私たちが調査しているムカラバにしか見られません。これはムカラバの気温が高くて、熱くなった体を冷やそうという行動だと思います。

驚いたことに、おとなのメスどうしのグルーミング（毛づくろい）はマウンテンゴリラにしか見られず、おとなのオスとメスのグルーミングもニシローランドゴリラにはめったに見られません。これはオスとメスの社会関係が2種の間で異なっていることを示しています。いつもよくまとまって行動するマウンテンゴリラに比べ、ニシローランドゴリラは広く分散しています。低地熱帯雨林ではゴリラの主食が果実で、少しずつ分散しているために、ゴリラも広く散らばる傾向があるからでしょう。胸を叩いてディスプレイしているオスにメスが抱きついて止めるのも、マウンテンゴリラにしか見られません。どうもオスとメスの関係も種間で違うようです。

マウンテンゴリラ、ニシローランドゴリラのそれぞれの種内の地域間で違いが見られたのは、シルバーバックと子どもの遊び、子どもが赤ん坊を背中に乗せて運ぶ行動、指で歯を磨く、ベッドを作らずに寝る、葉っぱを体に巻いて休む、仲間の死体の元へ繰り返しもどる、などの行動です。これらは、群れの構成や個体の年齢などによって現れ方が違ったり、環境の違いが微妙に影響していると考えられ、これからもっとデータを集めて慎重に分析する必要があるでしょう。

ともあれ、ゴリラの行動の地域差が初めて明らかになり、種間で社会関係が異なることがわかってきたことは重要です。今後、動物園のゴリラの行動とも合わせて調べていけば、ゴリラの能力がもっとよくわかるようになると期待しています。

Robbins MM, Ando C, Fawcett KA, Grueter CC, Hedwig D, Iwata Y, Lodwick JL, Masi S, Salmi R, Stoinski TS, Todd A, Vercellio V, Yamagiwa J (2016). Behavioral Variation in Gorillas: Evidence of Potential Cultural Traits. PLOS ONE 11(9): e0160483. doi:10.1371/journal.pone.0160483

ポポフの学校では、このように名前がつけられたゴリラの集団の近況を定期的に報告し、子どもたちはゴリラたちの様子を聞くのをとても楽しみにしています。子どもたちの口から村人たちにもゴリラたちの暮らしが伝えられま

す。昨年から子どもたちの手によって、ゴリラグッズの製作も始まりました。カフジのゴリラたちが地元の人々の関心の的になり、温かく見守られていてほしいと願っています。



休み時間のお母さんと子どもたち



カフジにおけるゴリラの近況

山極寿一

この1年間、カフジ・ビエガ国立公園はとても平和な日々が続き、目立った混乱もありませんでした。公園の低地部（標高 600 ～ 1,800 メートル）はまだ反政府勢力が支配しており、時折武力衝突があるようですが、観光客の訪れる高地部（標高 1,800 ～ 3,308 メートル）は武装集団が出没することなく、密猟でゴリラが被害に会うこともありませんでした。

今年はチマヌーカ集団、ガニヤムルメ集団、マンコト集団にそれぞれ1頭ずつ赤ちゃんが生まれ、すくすくと育っています。性別はまだ分かりません。シルバーバックのチマヌーカは健在で、30頭近い大集団を率い、ますます貫禄が出てきました。2組の双子たちも元気に育っています。ガニヤムルメ集団は12月に竹の子の季節が終わると、カ

カフジ・ビエガ国立公園でモニターされているゴリラ集団の現在の構成

集団名	シルバーバック	ブラックバック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	合 計
	13 歳以上	8-12 歳	8 歳以上	6-8 歳	3-6 歳	0-3 歳	
ムガルカ	1						1
チマヌーカ	1		14	2	5	7	29
ビリンドゥワ	1		3		3	2	9
ムファンザーラ	1		8	3	4	2	18
ランガ	1		5		1	1	8
ムブングウェ	1		6				7
ガニヤムルメ	1		8		2	4	15
マンコト	1		10	1	1	3	16
無 名	1	1	10			3	15
合 計	9	1	64	6	16	22	118

活動報告

(2016年6月から2017年5月まで)	
▼2016年	
6月2日	みどり会講演「ゴリラから見た人間社会とリーダーシップ」 山極寿一 パレスホテル東京(東京)
6月25日	日本学術会議自然人類学分科会主催シンポジウム「人類 1000 万年史」「類人猿はなぜ熱帯雨林を出られなかったのか」 山極寿一 東京大学理学部2号館大講堂(東京)
7月13日	みずほ若葉会講演「サル化する人間社会」 山極寿一 ザ・プリンスパークタワー東京(東京)
7月21日	Symposium for 50th anniversary of promotion of science and technology cooperation between Africa and Japan, “The 50-year history of African Studies”, Juichi Yamagiwa.Serena Hotel (Nairobi, Kenya)
9月16日	京大やまなみ会講演会「雪山からジャングルへーサルとゴリラを追った半世紀ー」 山極寿一 山ノ内町中央公民館(山ノ内町)
9月19日	兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科博士後期課程開設記念フォーラム特別講演「ゴリラに学んだ地域づくり」 山極寿一 豊岡稽古堂(豊岡市)
10月8日	広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科設立 10 周年記念特別講演「ゴリラからみた人間の子どもの不思議」 山極寿一 広島女学院大学ランバスホール(広島市)
10月15日	日本学術会議近畿支部公開シンポジウム「アフリカの進化と文化ーわれわれがアフリカから学ぶことー」 「ゴリラから学んだ人類の進化」 山極寿一 京都大学国際科学イノベーション棟シンポジウムホール(京都市)
10月18日	京都産業大学特別対談シリーズ マイ・チャレンジ「サルやゴリラと歩いた半世紀」 山極寿一 京都産業大学神山ホール(京都市)
11月19-20日	SAGA 19 (Support for Asian and African Great Apes) ポポフ出展 ときわ動物園・ときわ湖水ホール(山口県宇部市)
11月26日	日本乳幼児教育学会第 26 回大会基調講演「ゴリラの目で人間の子どもの不思議を考える」 山極寿一 神戸ポートピアホテルオークラ(神戸市)
12月10日	相山女学園大学創立 111 周年記念相山フォーラム「ヒト・ひと・人」人間性の起源とゆくえー 霊長類学と臨床哲学の対話「サル化する人間社会」 山極寿一 相山女学園大学(名古屋市)
12月16日	経団連フォーラム 21 「ゴリラの世界から人間社会の本質を考える」 山極寿一 経団連会館(東京)
▼2017年	
1月28日	京機会関東支部講演会「人間社会の由来と未来ーゴリラとA Iをつなぐもの」 山極寿一 日立金属 高輪和彊館(東京)
3月3日	法然院森の夜の教室「ゴリラは戦わない」 山極寿一 法然院(京都市)
3月20日	連続講座「芸術は何処へ?」「ヒト以外の美意識ーゴリラから学ぶ」 山極寿一 京都府立文化芸術会館ホール(京都市)
3月26日	木城えほんの郷絵本の展示とお話 ふしはらのじこ 講演会「ゴリラに学んだもの」 山極寿一 ゴリラ狂言 茂山千三郎 木城えほんの郷(宮崎県木城町)
4月15日	野生動物学のすすめ「野生の窓としての動物園ーゴリラを例にして」 山極寿一 ポポフ展示 京都市動物園(京都市)
4月21日	ゴリラ楽 in KYOTOGRAPHIE「ゴリラにとって愛とは何か」 山極寿一 対談「ゴリラ楽と愛の起源」 茂山千三郎・山極寿一 京都文化博物館(京都市)
4月29日	知恩院学術講演「ゴリラの子育て、ヒトの子育て」 山極寿一 知恩院和順会館(京都市)

催しのご案内

▼2017年	
11月4、5日	サガシンポジウム (SAGA: Support for Asian and African Great apes) 日本モンキーセンター(犬山市)



会計報告

収 入		支 出	
昨年度よりの繰越金	2,623,790	ニュースレター印刷費	38,880
講演会・シンポジウム カンパ	107,918	ニュースレター・ホームページ作成費	6,524
作品売上寄付	30,000	ポポフグッズ材料費・制作費	42,584
ポポフグッズ売上(現金)	148,000	郵送費	3,941
寄付(現金)	1,881,308	ポポフへ送金	2,919,520
売上・寄付(郵便振替)	1,866,400	次年度へ繰越金	3,645,978
受取利子	11		
計	6,657,427	計	6,657,427

ろうきん東海 NPO 団体等寄付システム、日本グレイトエイプス保護基金、エネオスクリック募金から寄付金をいただいています。



近刊案内

- 山極寿一・小菅正夫著 『ゴリラは戦わないー平和主義、家族愛、楽天的』 中公新書ラクレ
- 山中伸哉・羽生善治・是枝裕和・山極壽一・永田和宏著 『僕たちが何者でもなかった頃の話をしよう』 文春新書
- 松原始著 『カラスと京都』 旅するミシン社
- 池上淳著 『文化資本論入門』 京都大学学術出版会
- 岩田誠 『ホモ ピクトル ムジカーリス』 中山書店
- 井田徹治 『霊長類ー消えゆく森の番人』 岩波新書
- 吉川弘之対談集 『科学と社会の対話』 国立研究開発法人科学技術振興機構科学コミュニケーションセンター企画・編 丸善出版
- 岩井雪乃著 『ぼくの村がゾウに襲われるわけ』 合同出版
- 菅原和孝著 『動物の境界ー現象学から展成の自然誌へ』 弘文堂
- 伊勢武史著 『生物進化とはなにか?』 ペレ出版
- ユヴァル・ノア・ハラリ著・柴田裕之訳 『サピエンス全史ー文明の構造と人類の幸福』 上下 河出書房新社
- 伊沢紘生・松岡史郎著 『自然がほほえむとき』 東京大学出版会
- 片山一道著 『身体が語る人間の歴史』 ちくまプリマー新書
- 松井孝典著 『文明はく見えない世界>がつくる』 岩波新書
- 小長谷有紀著 『ウメサオタダオが語る、梅棹忠夫ーアーカイブスの山に登る』 ミネルヴァ書房
- 椎野若菜・的場澄人編 『女も男もフィールドへ』 古今書院
- 辻大和・中川尚史編 『日本のサルー哺乳類学としてのニホンザル研究』 東京大学出版会
- オギュスタン・ベルク著・鳥海基樹訳 『理想の住まいー隠遁から殺風景へ』 京都大学学術出版会
- 尾本恵市著 『ヒトと文明ー狩猟採集民から現代を見る』 ちくま新書
- 鎌田東二著 『日本人は死んだらどこへ行くのか』 PHP 新書
- 小原克博・勝又悦子著 『宗教と対話ー多文化共生社会の中で』 教文館
- チャンドラ・ウィックラマシング著・松井孝典監修・所源亮訳 『彗星バンスペルミア』 恒星社厚生閣

ポポフ・グッズ



☆ピチブ・ムフンブーカ 絵はがきセット

(おまかせ5枚組) 600円



☆ケタイ・ストラップ (黒)

2000円



☆ポポフ絵はがきセット

(おまかせ10枚組) 1000円

☆ポポフエコバッグ

(薄手) 1500円 / (厚手) 2500円
【ア】～【カ】の図柄をご指定ください

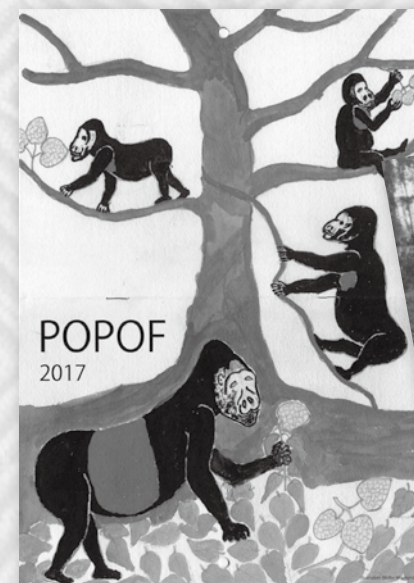
*エコバッグの生地は厚手と薄手があります。注文時にどちらかをご明記してください。薄手は注文から納品までひと月ほどかかります



他にも図柄が選べるバラ売りの絵はがきや、ポポフを応援するアーティストによるイラストのエコバッグがたくさんあります。また、ここに掲載できなかったグッズも用意しています。「ポポフ ホームページ」のグッズページも是非ご覧ください。

ポポフグッズのページ

http://popof-japan.com/blog/?page_id=24



(2017年のサンプル)



☆ポポフ 2018 年カレンダー

(予約販売 11 月頃配布)
1000円

ポポフ日本支部では、ポポフのメンバーが作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は郵便局で「青色」の振り込み用紙にご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。

口座番号：00810-1-90217
加入者名：ポレポレ基金

郵便振替情報 QR コード ▶



お願い：ポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

連絡先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室
ポポフ日本支部



ウェブサイト



ポポフ日本支部の公式ウェブサイトには、ポポフの活動、ゴリラ、カフジ・ビエガ国立公園を紹介するページや、グッズの販売、ポポフニュースのバックナンバー閲覧ができるページがあります。また、ポポフニュースに連載されているコンゴの昔話は挿絵が原画のカラーになっています。

ポポフの活動をより広く世界の人々に知ってもらうために、英語版のウェブサイトがあります。ポポフのこれまでの歩みや現在の活動の様子、スタッフ、カフジ・ビエガ国立公園、ゴリラなどについて情報を発信していきます。また、このウェブサイトと並行してブログも開設しました。こちらではポポフの活動だけでなく、国立公園周辺の村や町に住む人々の息遣いが聞こえてくるような、日常的な出来事を記事にして載せています。海外のお知り合いなどにご紹介いただければ幸いです

河辺智弘 (ポポフ英語版ホームページ担当)

ポポフのホームページ (日本語)

日本語サイト：<http://popof-japan.com/blog/>



ポポフの英語版ウェブサイト

英語サイト：<http://www.polepolefoundation.org/>



英語ブログ：<http://www.blog.polepolefoundation.org/>



話す骨

語り手：バサボセ・カニユニ
挿し絵：訳：ふしはら のじこ



あるところに1人の男がいました。その男は自分の村を出て、あちこち旅していました。

その男は、おしゃべりな男でした。ある日、森の中で人の骨に出会いました。頭の骨がそこにありました。男は骨を見て

「おいおい、どうしたんだい」と言いました。すると骨が

「私がこんな姿になってしまったのは、しゃべりすぎのせいなんだ」と言いました。

「えっ本当かい」と男はたいそう驚きました。「そうなんだ。ところで見るところ、お前さんもそうとうおしゃべりみたいだけど、私の様な目に合わないといいんだけどね」と骨は言いました。

男はその骨をひろい、かばんに入れて、村へ向かいました。「これで村に着いたら、話すことがいっぱいあるぞ」

そして、ある村にやって来ました。村に来た時にはまず、村の長老のところを訪ねて挨拶に行くのが礼儀です。

男は村の長老たちを訪ねると、王様に会いたいと言いました。長老たちが何故王様に会いたいのかと尋ねると、男はこう言いました。

「とても大切ないいことがあるので、王様にお目通りさせてください」

「それはどんなことなんだ」と長老たちは聞きました。

「とてもいいことがあるのです。王様に会わせてくだされば分かります」

「王様はそんな訳の分からないことで、人にお会いにならない。まず我々に話をして、我々が王様にその話をお伝えしようじゃないか」

「私はとても大変なものを持っているのです。ここにあるこの骨、この骨がしゃべるのを王様にお見せしたいのです」

「ええっ！骨がしゃべるのか。それは驚きだ。では王様のところへ連れて行ってやろう」

こうして、男は王様の前へ案内されました。男は言いました。「私はここに、大変なものを持ってまいりました。ここにあるこの骨、これはしゃべる骨でございます」

王様はその話を聞くと、

「それは本当か、そんな大変なことは聞いたことがないぞ。私1人で聞く訳にはいかない。村中のものを呼び集めてから、披露してもらおうじゃないか」と言いました。

コンゴでは、人々を集める時に太鼓を叩いて呼びます。人々は太鼓の音色を聞いただけで、伝言の意味を聞き分けることができます。

王様は男に言いました。

「お前の言うことを信じて人々を集めるのだから、もしそれが嘘だったら、お前の命はないぞ」

「はい、承知しております」と男は答えました。

王は太鼓を鳴らし、村中の人々を呼び集めました。王様は普段はめったに人の前に姿を表したりしないのですが、この日は特別に人々の前に出て、

「この男が大変なものを持って来た。それを今からここで披露するぞ」と、自ら話をされました。

とても大勢の人が集まって来ましたので、しゃべりたがりの男は大喜びで人々の前へ出

ました。

「私はここにあるものを持って来ました。これを皆さんにお見せしましょう」

そう言うと、骨を取り出しました。男は話しながら、おもむろに骨を机の上に置くと、人々はしーんとして息をのみました。

「おい骨、なんでお前はそんな姿になったのか言ってみろ」男は骨に呼びかけました。骨は何も答えません。男は目玉が飛び出しそうになりました。

「おい、さっき何を言ったか思い出せよ。さっき言ったことを話してくれよ。どうしてそんな姿になったのか、言ってくれよ。どうしたんだ」

骨は何も話しませんでした。

王様は、たくさんの人を呼び集めたのにその前で恥をかかれ、大変怒って、服を引きちぎり、帰って行きました。

長老たちは「なんということだ、えらいことになってしまったぞ」と慌てて、男を殺すことにしました。王様の家来が男を殺してしまいました。すると、その時に骨がしゃべりました。「ほら、言ったじゃないか。私はしゃべりすぎがたたって死んだんだ。お前さんも気をつけろと言っただろう」

人々はたいそう驚きました。

「本当に骨がしゃべったぞ」

でも、もうその時、男は殺されてしまっていました。

「私はしゃべりすぎて死んだと言ったじゃないか。せっかく注意してやったのに、やっぱりしゃべりすぎて死んでしまったな」と、骨は言いました。

このお話が教えるのは、大切なことはすぐ人を呼び集めて話してしまわないで、まず信頼のおける友人の1人か2人に相談してから、皆の前で披露しなさいということです。